

大野ロベルト，相原朋枝編 『Butoh 入門 肉体を翻訳する』

國吉和子

大野ロベルトと相原朋枝の共編著による本書は、海外からの寄稿も含めて全体が7章から構成され、巻頭と巻末に「舞踏「囀」譜」（舞踏第一世代～第三世代の舞踏家から38名を選び写真と簡単な紹介文を添えたページ）、「舞踏「書」譜」（主な参考文献・映像リスト）、「舞踏「年」譜」（1900年～2018年の、日本の近代舞踊から舞踏に至る主な事項の年譜）を添えている。章の合間には酒向治子、横尾咲子、塚田美紀によるColumnが挿入されている。

まずは序文にかわるN子とT枝のカジュアルな談話によると、この入門書は「舞踏を言葉としてとらえる本」であり、舞踏について書かれた（語られた）言葉を手掛かりとして、舞踏をより広い視野のもとにとらえることができるようにまとめられた本だという。

冒頭には大野による二本の論考が充てられていて、この本全体の優に三分の一を占めている。第一章「綱渡りする死体——日本語の身体性」では、謡曲「井筒」の詞章とその出典とされる『古今和歌集』の記述を比較分析することによって、土方巽の舞踏の源流を明らかにしようとする。このような設定について大野は、「能の詞章を、舞踏の水脈の遙か上流に措定して」みる事が狙いだという。

中世文学を専門とする大野の論考は、「平安以来の歌の体系をなぞりながら意味内容を綴」った謡曲にみられる修辞法をはじめ、主人公の心情表現、さらに音の繰り返しや衣をめぐる多彩な表現に言及、その詳細にわたる例証と丹念な現代語訳を添えるなど、この書物が舞踏入門とされていたことを忘れてしまうほどである。こうした詞章の彩と能の構造に関する考察が、どこで舞踏と関係してくるかという点、ともに言葉に支えられた舞台に立つ身体というところで、大野は結びつけて考察しているようだ。「ある程度まで言語化しなければ、誰も土方の舞踏に価値を見出すことはできない。」と断言し、土方の舞踏を文化の中で評価するには、それについて語られた（あるいは記された）言説と、危うい均衡を保つ身体、その身体を支えている言説を別の言葉に翻訳することが重要なのだと説く。そこにタイトルの「綱渡りする死体」——言葉で張られたワイヤーの上を渡る身体——の意味が初めて明らかにされる。つまり物語世界を語る謡曲並びに詞章とその世界を具体化する能役者の身体と、舞踏について語られた言

葉と舞踏家の身体、この両者が相似の関係にあるとは決していえないところをあえて「綱渡り」という比喩を用いて両者を同様に語る離れ業を試みたということだと、評者は判断したのだが、肝心の舞踏家の言葉についての言及がほとんど見られず、この果敢な試みが功を奏したか否か判断することができない。なお、引用されたヴァレリーの翻訳文中の「舞踊」が「舞踏」と誤記されていた。

続く第二章「肉体と観念の三重奏——土方巽・澁澤龍彦・三島由紀夫」では、1960年代初頭の「土方巽DANCE EXPERIENCEの会」を通じて実現した、土方、澁澤、三島の出会いをめぐる考察である。三島を頂点として、その底辺に澁澤と土方を配した三角形は常に「肉体」をめぐる言説でバランスを保っていた。澁澤のサド裁判から人形愛に至る流れを、また、三島の肉体改造への執着から自決にいたる流れを、いずれも肉体者土方との関係なくしてはありえなかったと大野は推測している。しかし、二人の文学者を結びつけていた土方の言葉についてはほとんど検証されなまま論考を終えているのは全く拍子抜けである。

とまれ確かに土方の1960年代には三島や澁澤のみならず、これまでも多くの文学者とのかわりが指摘されてきた。彼らは土方の暗黒舞踏に接し、大いにその詩囊を肥やし、かつインスピレーションを互いに共有したといわれている。実際に土方の作品を見ることの叶わなかった後続の者としては、こうした文学者らの残した言葉を手掛かりとして当時の様子を想像するしかない。いわば言葉によって肥大、加速された——本書でいう「翻訳」された——肉体を、土方の初期舞踏に重ねてきたのかもしれない。

大野の論考に戻ると、やはりこの章でも要となる土方の言葉からの引用がひとつも無い。土方が「自らの肉体を言語によって表象する方法を模索」していたとするなら、その裏付けとなる土方の言葉についての論考が必要である。

もうひとりの編著者の相原朋枝は舞踏家自身による言葉を軸として、論考を二本、いずれも舞踏家の稽古に実際に参加した記録に基づいて紹介している。

まず第三章「舞踏の技法、舞踏の身体——大駱駝艦と野口体操」では、舞踏の技法研究として磨赤兒主宰の大駱駝艦ワークショップの参与観察記録をもとに考察している。これまで土方が実践し

たといわれる「舞踏ノート」(以下、表記は所謂「舞踏譜」で統一する)による技法研究に偏っていた領域に対して、野口体操も参考にして作られた大駱駝艦システムが紹介される。先行研究の中には野口体操と舞踏の身体訓練の関係について言及したものは、これまでもないわけではなかったが、いずれも土方門下直系の舞踏家によるものだった。今回、相原の報告と考察はまた別の角度からの舞踏理解に役立つだろう。特に、「私が踊る」のではなく、「動かされる」という受動態の状態が目指されていることに言及しているところである。土方が独自に考案し、弟子の指導に実践していた主体の放棄という暗黒舞踏の態勢が、磨による咀嚼・翻案を経て、このような独自の展開をみせているということがわかる。

さらに相原は第七章「言葉で踊る 一九九五年の大野一雄」と題して、横浜上星川の大野一雄舞踏研究所の稽古に参加、その折の大野の言葉に沿って、彼の舞踏とその基盤となる宇宙観に言及、考察している。相原のリサーチで興味深いのは、「大野にとり研究生はいわば触媒であった。」というところである。大野が自身の作品の公演に向けてさまざまに試行錯誤する時間が、研究生と共有されていた。膨大なメモを繰り返し書き記し、かつ語り続けていた大野の言葉、いずれも本番のステージに向けての稽古であり、その同じ場で学んでいた研究生は大野にとっても作品形成に欠くことのできない役割を担っていたという指摘である。大野の踊りが本番の舞台に昇華される前、未完成な踊りと言葉が密接につながっていた稽古場は、単に教えを受ける場だけではなかった。大野にとっても研究生にとってもともに未知の踊りを捜し、見出す場でもあったのだ。

第六章「舞踏とコンテンポラリーダンス 和栗由紀夫との協働を超えて」では、舞踊家の関典子が舞踏家と和栗由紀夫の指導のもと、土方巽の舞踏メソッドを体験しながら、作品を創作した記録である。関があえて「協働」作業と位置付けたのは、土方が和栗に伝えた舞踏技法のひとつ「舞踏譜」を共有しながら、二人の相互作用として作品を創作する、つまり関と和栗が対等の立場で振り付けに関わり、お互いの信頼関係を大切にしつつ、公演を前提とした新作を創作したというところが、通常の参与観察記録とは異なる。関の報告には、晩年亡くなる直前の和栗の言葉が記録されている。関は和栗から指示を受けながら、「模写から始め、言葉をきっかけに身体感覚の変容が起こり、自身の舞踏の片鱗のようなものを見出すことができた」という。和栗の系統立てた教授法や説得力のある語りは、舞踏への扉を大きく広げたといえるだろう。近年、国内外のコンテンポラリーダンサーからも高い関心がよせられている土方の

舞踏、そのきっかけとなったのがこの「舞踏譜」だといっても過言ではない。海外における舞踏の受容についての報告が、次の2本である。

海外からの寄稿は、本書の刊行動機ともなっているという2018年刊行の“The Routledge Companion to Butoh Performance”(2018年, Routledge)の共編著者ブルース・ベアードとローズマリー・キャンデラリオである。

「西洋的欲望の迷宮に踊る 日本国外での土方巽」を寄稿したブルース・ベアードは、アメリカにおける舞踏研究の先頭を走る研究者である。土方巽が舞踏の創始者であり国内ではカリスマ的な存在であったにもかかわらず、この20年ほど前まで国外ではほとんど知られていなかった原因を欧米における舞踏の受容史から検証している。そして現在、海外での土方研究や土方をモチーフとしたダンサーの創作等を力強くサポートしている慶應義塾大学アートセンター土方巽アーカイヴの多彩な活動を紹介している。

一方、「舞踏百景 グローバルでローカルなダンス」を寄稿したローズマリー・キャンデラリオは、自ら舞踏家としても活動を続ける研究者である。この論考では、「新たなローカル舞踏」と称して、日本で舞踏を学び、主に海外で活躍する舞踏家の可能性について論じている。彼らの作品に共通するのは、身体を自然のなか置き、その関わりの中で踊りをとらえなおすという傾向だということ。これはそもそもの誤解から生まれたもので、土方の東北までさかのぼる。当時、反近代性、地方的固有性の象徴と位置付けられていた土方の東北という概念が、特定の風景(東北)に直結し、それが日本に対する本質主義的なイメージに結びつけられ、風景、自然こそ舞踏の根源として受容された。大野一雄の場合は神秘的で比喩的な自然という形で世界に広まった。しかしこの自然と身体という概念は、その後、「新たなローカル舞踏」の間では、それぞれの文化的背景を生かし、シャーマニズムや環境哲学などと結びつきながら、独自の展開をみせているという。「新たなローカル舞踏」の近年の活動を知ることができる。

本書は全体に——舞踏について語られた(書かれた)言葉についての言葉——であり、副題の「肉体を翻訳する」は「舞踏を翻訳する」とするべきだ。ともかく「舞踏」の周囲を回っていても核心には至れないし、外部からの視線が横断的アプローチだとはいえない。「あとがき」に表明した日本の舞踏研究の現状を批判するなら、より明確な意図をもって編集するべきではないだろうか。JSPS 科研費助成。

(文学通信, 2021年12月刊行)